

局及び學生會との共同主催の下に開かれた。先づ稻葉學務部長の挨拶、次いで本學教授三品彰英氏、花園大學教授、久松眞一氏の講演あり、盛會裡に四時終了。以下は講演の要旨である。

## 宗祖から蓮師へ

本學教授 三品彰英  
文 博

淨土教の發祥は支那であるが、中國で發達した淨土教の教義及び實踐には、中國的な色彩が極めて濃い。一體中國では、儒教と道教の二つの綜合が精神文化を形造るが、前者は現實的であり、後者は呪的宗教的立場である。淨土系思想に於ても一例へば曇鸞の著述にみられるが如く——それが東洋的社會の本質に關聯があると思はれるが、淨土教はかかる社會の *magico-religious* なものを含みつつ發達して來たのである。日本に入つた淨土教は藤原時代に隆盛を極めるが、教義に於ても實踐に於てもさういふ傾向が頗る強く殘存してゐる。之を受けて宗祖聖人が新しい教義を展開されたのであるが、その教義は淨土教としては大きい飛躍であり *magico-religious* なるものを止揚し之を雜行雜修の名に於て排された。此の事は宗祖の信仰と實踐が呪術性を包藏してゐる中世の社會や思想感情と大きい距離が出来たことを意味する。この教義が社會的實踐として大衆(同行)の間に傳はる時、所謂教團なるものが成立するのであるが、ここに上述の事情が眞宗教團の根本的問題となるのである。即ち祖師の教義が大衆の中に受容れられる事は *magico-religion* が

返り咲く傾向を持ち來るのである。かく教義内容が民衆の沒知性的中世的社會から距つてゐた事と、今一つ祖師は布教をされず教團を構成する考がなかつた事と——此の二つの事柄から、祖師遷化以後の教團は、祖師によつてではなく、その末流を汲む人々によつて創られねばならなかつた。

このやうな歴史的事情からすれば眞宗教團の成立は異安心の生ずる過程に外ならぬとも考へられるが、事實眞宗の異安心史は次の如き二つの特徴を以て相經緯してゐる。即ち一は社會的實踐面のそれであり、他は思辨的なるものである。時代的に言へば、前者は中世的、後者は學問研究を背景とする近代的なものと言ひ得よう。此の二つは明らかに祖師の教義の特徴的な側面より生ずるもので、前者は魔術的宗教と祖師の教義との對決といふ歴史の必然的な現はれであり、後者は學問的に取上げられた祖師教義の本質的誤解である。以下私は社會的實踐の面に現はれ來た中世的異安心を教團の成立發展の上に眺めてみたい。

かかる大きい問題に突き當られたのは、先づ覺如上人である。この時代に當つて教團として爲すべき重要事は、祖師の傳記を書く事と祖師の遺された言葉を正しく了解する事であつたが、覺師は之に對して御傳鈔と口傳鈔改邪鈔などを書かれた。元來祖師の教義程非大衆的なものはないが、教團が大衆を前にした場合祖師の傳を正しく作り、正しく教義を領解する事が、それだけより多く要求されたのである。此處に覺師が、領解を誤つたものが教團を間違つた方向に押進めて行く危險に對して

改邪鈔を書かれたのは正しい指導であつたが、その高所から叱責するところに、覺師が、當時を同行間に人氣が悪く又現在の民主主義的立場からも貴族的教團の成立者として難じられ、一方教學の方面に於てもはつきり云ひ過ぎる點に非難がある様である。(例へば歎異鈔に對して改邪鈔とされた事、祖師の「オソルベキコトナリ」「フビンノ事ナリ」と云ふ悲歎的言辭に對して、覺師の「スベカラズ候」等の叱正的言辭が對稱的のみられる)以上の點から思ふに覺師は評判の悪い人であり、又敵も多かつたと察せられるが、それが又覺師のすぐれた點でもあつた。逆に存覺上人はやはらかい調子で、従つて評判もよかつたのであるが、一例せばその著淨土見聞集の如きは同行大衆に同ずる嫌ひなしとしない。地獄極樂の事を述べられたのは、布教の手段として、方便の爲とは言ひ條、中世的魔術的宗教への恐れが充分に含まれてゐるのである。之は覺師の行き方と全然反對の方向を持つ。覺師は、他派には勿論、同行に對しても嚴しい批判を——例へば信なくして派手な葬式をするのは止めよ、或は春秋彼岸の法要もいはれなき事といふ様な批判さへ少なくない。之等は決して間違でなく、ただ祖師の教義を鮮明にすると共に、同行の異義邪計を拂はんとされたのである。異義邪計は中世的なるもの致す所であり、祖師の教へはかゝる魔術的没知性的なものと對決を迫られてゐた。その矢面に立つたのが覺師であつたが、それは失敗に終つたのである。此の解決は蓮師を俟たねばならなかつた。

蓮師は、純如・善如の儀禮的・非親鸞的な行き方を受けて立

たれたが、先づ前半生は教學の爲に費された。さうして祖師の教義をより端的に明白に示されると共に、破邪の劍を振つて今迄の異義邪計を排せられた。この點は覺師に相通するものがあり、例へば本堂の本尊の中で流義に反するものは風呂に焼く程の斷固たる態度を見せてをられる。併し一方蓮師は同行の中に入り——殊に後半生は社會大衆に學ばれたのであつて、先づ大衆と共にあつて大衆を學ぶを忘れず、又悪い點に對しては肝要の所を一寸直す——所謂急所を押へられたのである。之は理窟でなく體驗である。例へば御一代開書にあるが、勤行是非の論に對して、佛恩報謝になれば讀經もよいとしてをられ、又越前の彼岸法要の際の御文に於ては、所謂彼岸を天文的自然風土的に解釋し、他宗的解釋を超越して、唯その好季節に寄り集つて念佛相續せんといふ態度であつて、覺師の如く閉き直るのではなかつた。大衆の中にあつて大衆に流されず、大衆に學ぶ事によつて、大衆の眼を以て眞宗の正しい道を歩まれたのであつて、大衆の外から叱責されたのではない。蓮師の「タノム」といふ言葉も、宗教的テクニクでなく、大衆の言葉であり、その中から深い意味を持たせられたものである。

茲に教團發達過程に於ける社會的異安心の問題は蓮師によつて解決された。しかしそれは今日何處迄當嵌まるであらうか。

蓮師當時の大衆と今日の大衆とは異つてゐる。隨つて我々は蓮師に學ばんとすれば先づ大衆を學ばねばならぬ。大衆の實相・大衆の生活を掴まねばならぬ。

(在實記者)